

2020年
No.91
9月1日発行

国際こだいら



KODAIRA INTERNATIONAL FRIENDSHIP ASSOCIATION (KIFA)



- SARSの経験を活かした香港
- お手伝いさんとの泣き笑い
- アメリカの小学校 ほか

3面「ケニアの動物たち」より アンボセリ国立公園近くのマサイ村にて

新型コロナウイルスとKIFAのあり方

新型コロナウイルスの感染拡大とその対策のための自粛生活は、設立から今年で30周年を迎えるKIFAが、この先の10年、20年どのような方向にかじを切っていかなければならないのか、私たちに大きな宿題を突き付けました。

KIFAの活動は大きく分けて3つの柱があります。①外国人が自立して生活するためのサポートをする活動、②日本人が多文化共生について知識や経験を深めるための啓発活動、③日本人も外国人も関係なくお互いが楽しめ、隣人として知り合えるような交流活動です。この中の②の啓発活動と③の交流活動は、活動が制限される中、すべての講座やイベントが休止となりました。

①の支援活動は、本来このような時期にこそ強化しなければならぬ活動です。KIFA事業としては、日本語会話教室、こども日本語学習支援教室、翻訳通訳事業、生活情報提供、災害時対応などがこれにあたります。しかし、ウィルスの感染拡大を防ぐためには、対面で行われてきたこれらの活動も、すべて中止にせざるを得ませんでした。学校が休校になり、オンライン授業の対応ができる学校とそうでない学校とで格差が広がったように、日本語教室や学習支援教室も、オンラインでの対応ができない地域団体の教室では、学びの場がなくなってしまったのです。

情報提供という観点からは、事務局で把握できた外国人向

けのサイトや相談窓口の情報を、KIFAのホームページやフェイスブックで発信していきました。初めのころは、日本語と英語、中国語くらいしか対応していない情報が多かったのですが、日が経つにつれて、やさしい日本語、ネパール語やタガログ語など多言語で発信されるものが増えていきました。多くの機関から多言語での情報発信がなされた結果、KIFAに直接寄せられる相談はほとんどなく、東京都が開設した『外国人新型コロナ生活相談センター(TOCOS)』や、NPO法人AMDA国際医療情報センターの新型コロナウイルス感染症多言語相談窓口に、外国人からの相談が殺到したようでした。

KIFAは行政機関ではありませんので、いろいろな相談が寄せられても、残念ながら直接対処することはできず、適切な窓口へ橋渡しするにとどまります。また、感染リスクを避けるためには、通訳の派遣も控えねばならず、組織としてKIFAに何ができるのか、大きな課題が投げかけられました。

新型コロナウイルスの治療薬やワクチンが開発されるまでは、出来ることを探しながら、なんとかやっていかなければなりません。活動の場がなくなってしまったボランティアのみなさん、活動休止で「仕方ない」と言って手をこまねいている段階はもう終わりです。ぜひ、これまでとは違った発想で、何かできることはないか、一緒に考えていきましょう。

事務局



SARSの経験を活かした香港

今年の2月の初めに香港の友人が日本に遊びに来た時、危機意識の低かった私はまさか新型コロナウイルスの被害がここまで拡大するとは夢にも思いませんでした。当時の香港ではマスクが入手できない状況だったので、花粉症の家族の為にストックしていたマスクを「日本は買えるから大丈夫よ」と言って渡しましたが、その後あっという間に日本もマスクや消毒液が入手できない状況になってしまいました。

2003年に感染が拡大したSARS（重症急性呼吸器症候群）の経験と教訓によって、香港市民や企業の防衛意識は非常に高くなっており、感染対策は素早く行動に移されました。早い段階から皆がマスクをし、手の消毒スプレーを持ち歩き、こまめに手の消毒をするなど、徹底されていたそうです。また在宅勤務がかなり進んでいて、公務員でも緊急性を要する人達以外は在宅勤務だったり、学校の授業も休校になってから1週間後には、全ての小中学校のオンライン授業が開始されました。不安な状況の中の子ども達も、先生や友達の顔を見ながら自宅で安心して授業を受けることが出来るのは、非常にうらやましいと思いました。

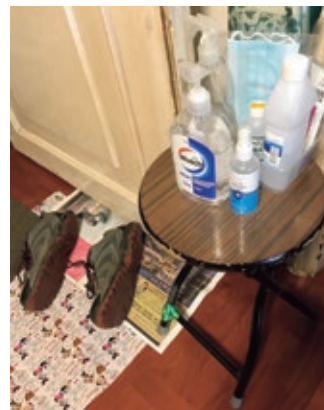
香港政府の対応も早く、欧米諸国から帰国した市民がウイ

ルスを持ち込むケースが目立ち始めると、過去2週間外国に滞在歴がある市民に対して、入境（入国）の際2週間の検疫を義務付ける他に、非香港市民の入境も禁止しました。2週間の自宅隔離期間中は、QRコードが付いたリストバンドを装備しなければならず、携帯電話と連動させて常にWi-FiとGPSをオンにすることが義務とされ、自宅にいるかどうかを常に監視されるシステムになっています。市民と政府の対応が功を奏し、香港は人口約750万人に対して、感染者約1,570人、死者もわずか8人に抑えられています（7月15日現在）。

香港は日本と同様に、外出禁止にはなっていませんでしたが、それでもここまで感染の拡大を最小限に抑えられたのは香港市民が感染症の恐ろしさを、身をもって知っているからだと思いました。

SARSの後、香港の人々の衛生意識は大きく変化しましたが、今回の新型コロナウイルスによって、日本や世界の国々の人々の生活も認識も大きく変わることでしょう。

張明子（機関紙ボランティア）



玄関先に置かれた消毒液など

お手伝いさんとの泣き笑い

～フィリピン～

24年間に及ぶアジア3カ国の海外駐在では、それぞれの土地でお手伝いさんを雇い、家族同然に生活を共にしていた。なかでも最初に赴任したフィリピンでの、若い彼女達との悪戦苦闘の日々は、40年経った今でも忘れられない。

フィリピンではお手伝いさんを住み込みで雇うのが一般的で、我が家も料理、掃除・洗濯、育児担当の3人を雇った。そのお陰で、一挙に4+3=7の賑やかな大家族となった。

外国人居住者で占めるビレッジ (village) と呼ばれる住宅区は、治安もよく住環境にも恵まれ、彼女達には人気の高い働き場所であった。そこでは、日本料理がよく出来るお手伝いさん



お手伝いさんと子どもたち

は、日本人主婦の間では引っ張りだこであった。

我が家の料理担当は新米のため、日々の献立を実演指導しながら、そのレシピをノートに記録させた。本人の学習意欲も手伝い、かなりの日本料理が調理出来るまでに上達した。

一安心!と一息ついたのも束の間、恋人との間に身ごもったことから、惜しくも仕事を辞め故郷のレイテ島へ帰った。

育児担当のお手伝いさんは、長男の幼稚園への送り迎えとフィリピンで誕生した二男の子守など、まるで我が子のように可愛がりよく面倒を見てくれた。4年の任期を終え帰国する当日は、我々が空港へ向かう直前まで一才半になる二男を抱きしめ、別れが辛くて泣いてばかりであった。今でもそのシーンは鮮明に記憶に残っている。その後もマニラで暮らしているのか、それとも故郷のミンダナオ島へ戻ったのだろうか?彼女も今や還暦の年令となった。

お手伝いさん同士の性格の違いや相性もあるのか、3人だと2対1で仲間割れすることもあり、ONE TEAMの家族としてまとめていくのは、なかなか容易ではなかった。故郷へ戻るとの理由で我が家を去ったお手伝いさんを、数日後に近所で見掛けることも珍しくはなかった。これも世界一流と言われる Filipino hospitality (フィリピン流おもてなし) と雇い主への配慮の現れ、と理解すれば腹立たしくはならなかった。

40年前のフィリピンは国の電力不足により、連日数時間に及ぶ停電が続き、常夏の地でその酷暑には耐えられなかった。どんな困難に直面しても、いつも明るく大らかに振舞う彼女達からは、必ずや「明日は明日の風が吹く」ことを学んだ。

洗いざらしのGパンとアイロンがけしたTシャツを着こなし、日曜の朝教会へ向かう彼女達の屈託ない笑顔が、常夏の灼熱の太陽と共に今でも眩しく映っている。

山田幸男（機関紙ボランティア）

アメリカの小学校

私は2007年からの5年間、ジョージア州とテキサス州で駐在員の家族として過ごし、3人の子どもたちはアメリカの現地校へ通っていました。

アメリカの小学校は学区によって制度が違いますが、入学前に『〇〇学校の規則を守ります』という誓約書に子どもが直筆でサインします。もちろん、やんちゃな子どももいて、あまりひどいと校長室へ呼ばれるのですが、日本に比べて先生の権利が守られている印象を受けました。

また、個人の年齢より能力によって学年が決まるので、毎学年末に進級できるか否かのテストがあり、合否によっては歳の近い兄弟が同じ学年になることもあります。長男は英語が話せなかったため、年齢より1つ下のFirst grade (1年生)に入りました。1クラス19人の少人数でした。日本人は1人しかいない学校だったのですが、英語が母語でない子どものためのESL (English as a Second Language) クラスがしっかりしていたおかげで、1年後には先生の話すことが大方理解できるようになりました。

昼食はカフェテリア (食堂) で、売っているランチやお弁当を食べます。それとは別に教室でのスナックタイムがあり、各自クラッカーや果物を持っています。日本の小学校では飴1つ見つかっただけでも怒られそうですが、アメリカではクリスマスやバレンタインデーにお菓子交換やお菓子パーティーをします。先生がご褒



ジョージア州の学校で

美に棒付きキャンディーをくれることもしばしば、誕生日の子どもはカップケーキやドーナツをクラスで配り、糖分が心配になるほどです。数の勉強でマカロニやシリアルを使うなど、糊でプリントに食べ物を張り付けるのには、びっくり仰天したものでした。

日本と違い、先生は働きたい学校を選んで就職活動するようで、好きな学年を何度も教えたり、自分の子どもが通っている学校で働く先生も多くいました。また、クラス名もMs. Marshall's classのように先生の名前で呼ばれていて、各々の教室は先生の個人的な好みで飾られていました。

長男の初めての担任は、小柄で知的なアフリカ系女性でした。拙い英語で不安な私にやさしく接してくれたのを思い出し、今でも温かい気持ちになります。

橋本ちさ (機関紙ボランティア)

ケニアの動物たち

~2019年9月に旅して~

赤道直下に位置するケニア、さぞかし暑いだろうと思いきや、国の大半が標高1500m近いところにあり、爽やかな気候に恵まれている。サファリを中心とする観光立国で、大きな動物保護地区を擁している。首都ナイロビから南に位置するアンボセリ国立公園、西部のナクル湖国立公園、ナイバシャ湖、タンザニアに隣接するマサイマラ国立保護区を旅し、そこで出会った動物たちの印象を紹介したい。

サファリ用の車はハイエースの改造車。公園に近い道は凄まじいデコボコで、乗っているとロデオ状態、車の横転を何度心配したかわからないほどだった。

ケニアで最もよく出会うのは、シマウマ、トムソンガゼルに象徴されるアンテロップ類とヌーだ。いたるところに群れてい



てサバンナの風景の代表格といえる。キリンと象もよく出会う。しかし、サファリの醍醐味はビッグファイブに遭遇することだろう。ライオン、サイ、バッファ

ロー、ヒョウ、象だが、残念ながらヒョウが現れることはなかった。サイも出会うのは難しく、たまたま林の中から出てきたミナミシロサイに鉢合わせしたことは幸いだった。クロサイと同様絶滅危惧種で、ミナミシロサイは南アフリカから移されたそう

だ。(キタシロサイもいるが今や絶滅寸前)ライオンやチーターなどの猛獣類は、縄張りがあり、かなり広い地域に点在している。サファリカー同士で居場所を連絡し合い、いたと連絡が入ると車を飛ばして現地に向かう。テレビなどで、よく動物の生態番組を見るが、実際に撮影するのは並みの苦勞でないことがよくわかる。

数日間のサファリで数多くの動物や鳥たちを見ることができたが、最も印象に残った動物と鳥がいる。一つは背黒ジャッカル。首筋から背中にかけて黒と灰色の毛が混ざって生えているのだが、目撃した途端「わあー」と思いシャッターを切った。もう一つは、カンムリヅル。頭に黄色の冠をかぶったような鶏冠があり、のど元の赤、黒に黄色の尾羽と実にカラフル。大型でこれも見たときは感嘆の声を上げた。理由があつてこのような姿になったのだろうが、実に興味深い。

サファリを通じて思ったことは、ありのままの自然は美しいということだ。確かに弱肉強食でハゲワシが群がる場面もあったが、それも含めて美しさを感じた。そして雄大なサバンナの大自然を保存していく重要さが身に染みた旅でもあった。

山川泰子 (機関紙ボランティア)

オンラインへのチャレンジ

2020年度の始まりは、新型コロナウイルスの感染拡大による、事業の中止や延期の嵐で迎えました。一度延期を決定した事業が、再度延期になることもしばしば。初めは、「仕方ない」とあきらめていましたが、日が経つにつれ、事務局内では「このままでいいのか?」と悩むことが増えていきました。

当時、事務局職員のオンライン会議経験はゼロ。「Zoomというのが良いらしい」ということはわかって、何をどこから始めたらいいのかわからない状況でした。手探りでいろいろ調べた結果、まずは開講が延期になっている英会話教室で、Zoomを使った「おしゃべりタイム」ならできるかもしれないということになりました。講師がZoomでのレッスン経験があること、ITに慣れていそうな受講生が多いことが、試行を決定した理由です。5月中旬、初中級から上級クラスの41名が、5回に分けた「おしゃべりタイム」に参加し、先生やクラスメイトとの会話を楽しみました。すでにZoomに慣れた様子の人がいる一方、事前に事務局にスマホやパソコンを持ち込んで、練習を一緒にやってみた人もおり、とにかくやってみようというチャレンジ精神に、事務局も刺激をうけたものです。



対面での講習会の様子 (5月30日)

他団体が日本語教室をZoomで開始しているという話も耳にするようになり、KIFAでも可能性を探るため、日本語会話教室や子ども日本語教室のボランティアを対象として、5月30日に講習会を開催

これからの行事予定

- ◎大人のための多文化理解講座 in English 10月頃 土曜日(全3回)
- ◎こだいら国際交流フェスティバル 中止
- ◎小平市日本語発表会 12月13日(日)

※新型コロナウイルスの感染状況により、予定は随時変更となります。詳しくは、KIFAミニレターまたはHPをご覧ください。

しました。Zoom経験豊富な若い講師に来てもらい、12名のボランティアが会議室にパソコンやスマホを持ち込み、実際に操作してみました。Zoom画面を見るのがはじめてという方が多かったにも関わらず、会議の主催者として相手を招待してみる、という作業までできました。

事務局もだいたい慣れてきたころ、すべてのボランティアにZoomを体験してもらいたいと考え、KIFA会員で、オンライン教育に先行して取り組んでいる星槎大学の三田地真実さんを講師に迎え、『オンラインによる』オンライン講習を実施しました。頭の堅い事務局では、講習会をオンラインで行う、という発想がありませんでした。正直、シニア世代が6割を占めるボランティアを対象として、オンラインによる講習会ができるのだろうかと不安もありましたが、みなさんの吸収力がとても高く、「オンライン会議に参加する」という第1段階をクリアすることができました。「楽しかった」という感想をいただいたときは、事務局としてもホッとしました。

今後、感染拡大の第2波、3波が襲ってきた場合には、講習会の経験を活かして、「これまでにない発想で」KIFA事業を考えていけたらと思っています。

事務局

令和元年度収支決算

(平成31年4月1日～令和2年3月31日まで)

● 収入の部

(単位:円)

科目	決算額
賛助会費収入	1,215,000
補助金収入(市補助金)	13,768,000
寄付金収入	31,000
事業収入	6,943,750
雑収入(預金利子等)	10,032
前期繰越収支差額	2,109,894
収入合計	24,077,676

● 支出の部

(単位:円)

科目	決算額
事業費	7,860,049
国際理解および国際親善の普及事業	5,566,206
地域における友好交流事業	278,935
地域や日本文化並びに外国都市や外国文化の紹介事業	129,845
国際交流情報の収集及び地域への情報提供事業	1,589,589
その他協会の目的事業	295,474
管理費(管理運営費)	14,297,610
支出合計	22,157,659

編集後記

今号は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、取材するイベントが休止になったので、機関紙ボランティアが知恵を絞り、各々の体験談などを持ち寄りました。

令和2年7月豪雨の被害も大きく、普通の生活が当たり前前にできることの有り難みを、ひしひしと感じています。お世話になった海外の友人達も、どうかご無事でありますように。(C.H)



発行日 2020年9月1日
発行 小平市国際交流協会
編集 機関紙グループ

〒187-0045
小平市学園西町2-12-22
学園西町地域センター 3階
TEL. 042-342-4488
FAX. 042-347-3003